



Data

監督: 内田伸輝

出演: 篠原ゆき子/倉科カナ/高畑
淳子/サヘル・ローズ/筒井
栞奈子/窪塚俊介

👁️👁️ みどころ

近時、石井裕也監督の『茜色に焼かれる』、瀬々敬久監督の『明日の食卓』、そして本作と、母親をテーマにした名作が相次いで公開されている。コロナ禍で社会が一変する中、有為の監督たちが逆境の中でも芽生えてくる“希望”の在り方に目を向けたわけだが、そのそれぞれの問題提起は如何に？

本作のメインテーマは、半身不随の母親と、その介護をしている一人娘との確執。「もう、やってられねえよ！」そんな心の叫びが、美人女優、篠原ゆき子演じるアラフォー女の口から聞こえそうだが、この母娘バトルは？

タイトルの『女たち』とは一体ナニ？それは、もう一人の美人女優、倉科カナを見ればわかるし、外国人介護士の女性サヘル・ローズの奮闘ぶりや、さらに自殺した養蜂家の妹、筒井栞奈子の登場を見れば、よくわかる。説明調を全面的に排した、非メジャー邦画の良さを、本作でしっかり味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■内田伸輝監督に注目！女優・篠原ゆき子にも注目！■□■

私はずっと注目している女優・杉野希妃がプロデュースした、内田伸輝監督の『おだやかな日常』（12年）（『シネマ30』209頁）は、2011年の3.11東日本大震災を受けて、園子温監督の『ヒミズ』（11年）（『シネマ28』210頁）や『希望の国』（12年）（『シネマ29』37頁）と同じように、原発事故から必然的に生じた放射能汚染問題をテーマにした問題提起作だった。

しかして、コロナ禍の今、内田監督は閉塞した日本から本作でどんな物語を紡いでいくの？私は4月15日に石井裕也監督の『茜色に焼かれる』（21年）（『シネマ48』148頁）を鑑賞し、6月12日に本作を鑑賞したが、2021年5月17日付日経新聞では、編集委員の古賀重樹氏が「日本映画が描き始めたコロナ禍の社会」、「逆境の中に芽生える

希望」というテーマで両作を比較検討しながら解説している。ここでは、前者は「追いつめられたシングルマザーが必死に生きる姿を描く」のに対し、後者（本作）は「分断の中に生まれる和解への糸口を示した」と解説されている。さあ、本作で内田監督はどんな切り口を？私はまずは、それに注目したい。

他方、『おだやかな日常』は私がはじめて見た美人女優・篠原ゆき子が女優・杉野希紀と対決した面白い映画だった。女優・篠原ゆき子は青山真治監督の『共喰い』（13年）ではセックスシーンにも果敢に挑戦する熱演を見せた（『シネマ31』30頁）うえ、その後もさまざまな映画やTVで大活躍、大躍進を続けている。いつ、漢字の“友希子”からひらがなの“ゆき子”に変わったのかは知らないが、本作ではそんな女優・篠原ゆき子にも注目！

私は昔から秋吉久美子と吉永小百合が大好きだし、歌手・南沙織も大好きだが、私見では、篠原ゆき子はこの3人を足して3で割ったような魅力が……。

■□■高畑淳子がすごい母親役を！■□■

本作と同じ日に観た『ブラックバード 家族が家族であるうちに』（19年）は、“安楽死”と真正面から向き合ったすばらしい映画だった。また、同作ではアカデミー主演女優のスーザン・サランドンとケイト・ウィンスレットの“母娘対決”が見ものだった。同作の母親はALS（筋萎縮性側索硬化症）患者だが、「管やパイプに繋がれて人工呼吸や人工栄養補給されるのは真っ平ごめん！」と考えた彼女が、その症状が軽度な今のうちに、安楽死を決意したところから、総勢8名の家族たちによる“最後の晚餐”のストーリーが展開していった。

それに対して、本作で高畑淳子が演ずる美咲の母親・美津子は、すでに右半身が麻痺し、呂律が回らない状態で介護が不可欠となる中、介護人の介護を受けながら娘の美咲にきつく当たる日々を過ごしていた。美咲の父親は自殺したそうだが、美津子に言わせれば、それは美咲のせい。そして、東京の大学を卒業しても就職氷河期の中、希望の仕事に就くことができず、恋愛も結婚もうまくいかず、故郷に戻り、アラフォー独身女の今に至っている美咲は、どうしてもなく“ダメ娘”らしい。毎日毎日そんな悪態をつかれながらの美咲の生活が辛いのは当然だから、いつかそんな“母娘のバトル”対決のシークエンスが……？

“ハリウッド・ビューティー”のシャーリーズ・セロンが『モンスター』（03年）（『シネマ6』238頁）で見た体形とモンスターぶりににはびっくりさせられたが、美人女優にとってそんな汚れ役への挑戦は大きな決意がいるはずだ。高畑淳子が美人女優かどうかは別として、本作に見る高畑淳子の“いじめ母さん”ぶりは迫力がある。いくら美咲が実の娘だと言っても、今ドキここまでハッキリ物が言えるケースはまずないのでは？したがって、本作後半に勃発する、お互いに堪忍袋の緒が切れた中での“母娘バトル”は物凄いシークエンスになっている。6月10日に観た『はるろうるひと』（21年）でも似たようなシークエンスがあったが、そちらは喚くばかりで、バトルの必然性が全く見えなかった。

それに比べれば、本作に見る“母娘”の殺し合い一歩手前の喧嘩シーンは、邦画史上に残る名シーンになっているから、本作に見るそれに注目！

■□■美咲の心の拠り所は香織！タイトルに納得！■□■

そんな美咲の心の拠り所は、小学校の同級生で、今は美しい自然の中で一人静かに蜂と暮らしている養蜂家の香織（倉科カナ）。内田伸輝監督作品は、メジャーの邦画やTVドラマと違って、“説明調”が全くないため、なぜ香織がここでこんな生活をしているのかは全くわからない。しかし、一人黙々と蜂蜜作りに精を出して働いている香織の姿は美しい。東京でのオフィス仕事は若者たちの一つの憧れかもしれないが、他方でこんな田舎暮らしがあることを、とりわけコロナ禍の今、しっかり見せてくれるのはうれしい。しかし、香織は笑顔をほとんど見せない上、時々手伝いに来る美咲と話をしている、どこか寂し気、そして、はかなげだ。それは一体なぜ？

香織を演じた倉科カナは、『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』（08年）（『シネマ18』61頁）や『夢売るふたり』（12年）（『シネマ29』61頁）等で私もよく知っている女優だが、これまで特に意識したことはなかった。本作でも、美咲の友人の養蜂家としてスクリーン上に登場している間は、そのレベルだった。しかし、本作中盤、激しく雨が降り続く中、一人テントに置いた食卓に着いて、チーズやパスタを食べ、ワインを飲みながら、一人寂しさに打ちひしがれ、大量の睡眠薬を飲んでいく香織の“一人芝居”は美しいうえ、実に素晴らしい。「自殺シーンなら、これがナンバー1」ともいえる、内田伸輝監督のこの演出の見事さと、女優・倉科カナの素晴らしい演技力に拍手！

本作にみる、主演の篠原ゆき子、母親役の高畑淳子、そして、美咲の親友・香織役の倉科カナの三者三様の演技を見れば、本作のタイトルが、『女たち』とされていることにも納得！

■□■この裏切りは！？母娘の対決は？女の不信は？■□■

2021年6月に入り、やっと菅首相が声高に叫ぶ“一日100万回”を目指してワクチン接種が進んできたが、これは一番手の“医療従事者”に続く、二番手の“65歳以上の高齢者”を対象としたもの。若者たちは一体いつ接種できるのか、さっぱりわからない。そんな中、現在開催中のG7（主要国首脳会議）では、東京五輪開催を前提にストーリーが進んでいるようだが、ホントにマスク下で五輪が開催されたら、次々と問題が起きる可能性がある。それでなくても、マスク生活を余儀なくされ続けている日本国民が今や疲れ果て、ストレスがたまり続けていることは明らかだ。

そんなコロナ禍、毎日毎日、こんな母親・美津子（高畑淳子）のこんな圧力下に置かれている美咲（篠原ゆき子）の精神状態が、マスクの下に隠されているその美しい顔と裏腹に、毎日苦痛に歪んでいることは明らかだ。スクリーン上では導入部でそんな美咲の唯一の支えだった彼氏・直樹（窪塚俊介）があつと驚く“裏切り”を見せるので、それに注目！ そんなシークエンスは逆にユーモラスな雰囲気もあるが、現実には深刻だ。直樹（の家族）

が被害届を出さなかったから美咲は刑事処分にはならなかったが、美咲の絶望感はいかばかり。そんな問題を発生させた美咲の精神状態がより不安定になったのは仕方ないが、そうかと言って、務めている地域の学童保育所でチョンボをしたのは、やはり美咲の責任だ。そんなトラブルで学童保育所も事実上クビにされた美咲を更に襲った危機は、思いもかけない親友・香織の自殺だった。それが前述した“最も美しいシーン”だが、なぜ香織が？香織は美咲とは違って、自立した女ではなかったの？

■□■外国人介護人の奮闘は？もう1人の若い女性は？■□■

私も一部出資した藤元明緒監督の『海辺の彼女たち』（20年）（『シネマ48』135頁）は、第33回東京国際映画祭「アジアの未来部門」グランプリの受賞等、予想以上の評判を広げている。日本の若者たちのダメぶりが顕著になっている今、同作に見るベトナムからの技能実習生をはじめとして、いわゆる「3K」職場での外国人労働者の活躍が日本では目立っている。と言うより、今や、彼女らがいなければ、厳しい「3K」職場の1つである介護の現場を担う人材の確保はできないだろう。

そんな私の目には、本作で直樹の代わりにやってきた外国人の介護士・田中マリアム（サヘル・ローズ）の真面目な奮闘ぶりに納得。当初、担当者が変わったとしてマリアムがやってきた時、美咲も母親もそれに納得できず、すぐに抗議の電話をかけていたが、マリアムの仕事ぶりを見てると、その真面目さに感心。その上、その心遣いは？

前任者、直樹のダメ男ぶりと対比すれば、なおさらこのマリアムの奮闘ぶりが目立つから、そこでも『女たち』というタイトルに納得することに・・・

■□■後半からは香織の妹も登場！『女たち』の一員に■□■

他方、養蜂家の香織からは最悪の形で縁を切られてしまった上、実の母親の首を絞め続けたことによって、少し前なら、あわや“尊属殺人罪”の重罪に処せられていたかもしれない美咲が“戻ってくる所”は母親の家しかなかった。しかし、美咲の心のよりどころであった香織が自殺してしまったことで、美咲の心は空虚なままだったが、ある日、香織の“職場”を訪れると、アレレ、蜂蜜作りに精を出している先客がいたからビックリ！

当初は、「あの～あなたは？」と互いにぎこちないあいさつを交わしていたが、その若い女性が香織の妹凛（筒井菘奈子）だとわかると、お互いのことは香織からよく聞かされていたので、たちまち2人は打ち解けあうことに。もっとも、香織を突然失ったことによって、美咲が心に大きな空白を抱えてしまったのと同じように、突然姉を失った凛の心の空白も大きかった。そんな2人が、誰もいない“仕事場”で互いに寄り添う姿は、これも香織の自殺シーンと同じように非常に美しいので必見！しっかり味わいたい。

■□■母と娘の再生は？蜂蜜の効用は？■□■

導入部はもとより、本作の中盤から後半にかけても、美津子と美咲母娘はもとより、一見世間から隔離されながらも独自の世界で自由に生きていたと思われていた香織も大きな問題を抱えていたことを容赦なく描き出した本作では、女たちの再生はあり得ない。そんな

な結論になりそうだが、さて本作の結末は？

香織は自殺してしまったから、その心の中はわからないし、その再生はありえない。しかし、香織亡き後、香織のファームにやって来た妹の凜は、その後、姉のやり方に従った蜂蜜作りをうまくこなしているらしい。もちろん、それを美咲は手伝っているが、その中で新たにわかったのは、マリアンは香織が作ったはちみつをこよなく愛していたこと。マリアンはこのはちみつを食べると、それだけで幸せになれたそうだが、それって一体どんな味？私にはそれがわからないが、それは妹の凜には、そして、美咲にもわかるらしい。

美津子と美咲との母娘バトルは、母親の死亡寸前まで進んだから、その仲直りは難しい。誰でもそう思うが、逆にあそこまでなりふり構わずお互いをぶつけ合ったから、お互いに悪いものを出し尽くした。そう言えれば、仲直りの糸口も・・・？1950年代に世界を二分した“米ソ冷戦”はケネディーVSフルシチョフの時代に、「ひょっとして、核戦争に・・・」という最悪の事態を迎えたが、幸いなことに、ソ連の内部崩壊とそれに伴う弱体化の中で、雪解けムードになっていった。どんな激しい母娘バトルを繰り広げようとも、ファームのはちみつを手伝っている美咲の帰る場所は美津子の家しかない。

本作ラストはそんなシークエンスになるが、そこで頼りになるのは、介護士のマリアンがいることだ。そして、母娘バトルの結末と女たちの再生のきっかけになる本作の小道具が、今は凜が作っている蜂蜜。マリアンの言う通り、この蜂蜜を食べればどんな人間でも幸せになれるとすれば、さあ、本作に見る女たちの再生は如何に？それは、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

2021（令和3）年6月14日記